

## ディレクター日誌 (活動・研修生の様子)

期 日 平成30年10月13(土)～14日(日)【1泊2日】

場 所 山口市秋穂二島・秋穂周辺

参加者 小学校5・6年生16人(男子7人・女子9人)

### 1日目「開会式・ジョブ・調理」

期 日 10月13日(土)

場 所 二島地域交流センター～杵崎の里  
～秋穂地域交流センター

4年目を迎える「仕事」へのアドベンチャープログラムが、山口市秋穂二島を舞台に2回目の開催を迎えた。県全域から多数の応募者があり、その中から16人(小学校5・6年、男子7人・女子9人)の子どもが集まった。場所は、山口市の南部に位置する秋穂二島。海にも山にも近く、広大な農地が広がっている。昨年度は、雨天の中での実施であったが、今年は2日とも晴れの天気予報。子どもたちのジョブプログラムへの思いの高まりは、ディレクターの私にもヒシヒシと伝わってきた。

テーマは『SHOKUで旅する2日間、とことん味わおう～体で働く、頭で働く、心で働く。「職」から「食」へ、仲間とともに』である。

まずは、子どもたちの出会い。そして、プログラムの説明を聞く。「食べ物、自分たちで働いて手にすること」を聞かされた子どもたちは不安と期待の表情を浮かべる。

仲間作りの第一歩は、アイスブレイクである。インストラクターとミニゲームをすることで子どもたちは徐々に心がほぐれていく。自己紹介の時には、笑顔も見られるようになっていた。

各自が持って来た持ち物から仕事に必要なものとするでないものを選別し、向かった先は農事組合法人杵崎の里。仕事の依頼をする前に荷物を置かせてもらおうと杵崎の里代表の野島さんに声をかけた。すると、「何をしに来たんだ、荷物を置く場所を聞く前に、何をしに来たのか言うものじゃないか。」という声が響く。一瞬全体の空気が凍りつく。子どもたちは、「仕事をさせてもらえるのは当たり前」という発想で一番大切なことを忘れていた。「私たちに仕事をさせてください!」と大きな声を全員で張り上げ、必死にお願いしたことで、子どもたちは仕事をさせてもらえることになった。仕事の内容を教えてもらい、子どもたちは牛の世話を中心とした



ジョブを開始した。みんなテキパキ、黙々と仕事に取り掛かっているが、会話は無い。「一人じゃ、この重いものは運べんじやろう。」と野島さんに声をかけられる。

「だれか行けよ・・・」という心の声が聞こえてきそうな人任せの子どもたち。ジョブの目的「仲間づくり」は、どうなるのだろうと頭を抱えるインストラクター。ジョブプログラムは、こんな状況からのスタートだった。

「ちょっと、こちらの仕事をして欲しいのだが・・・」

野島さんに誘導され後についていく子どもたち。そこには、山積みになった落花生があった。後ろを振り返ると更に多くの落花生が、畑から掘り出されたままの状態でおいてある。「これを全部実だけに仕分けして欲しい。やり方は・・・。あなたは、落花生を運ぶ仕事。あなたは・・・」。仕事には、分担が必要なことを実際に作業の中で伝える野島さん。落花生の実をとる作業を黙々と作業する子どもたち。しかし、作業の時間が経つにつれ、子どもたちが始めたのはおしゃべり・・・。「何年生なん



ん」「この作業面白いね」「落花生ってこうなっていたんじや」「食べてみたいな・・・」などなど。同じ場で、1つの目的に向かう作業は、子どもたちに共通の話題を生み出し、そこで徐々に子どもたちの心は打ち解けていった。

午前の仕事の対価としていただいたものはパンと栄養ゼリー。子どもたちは、班のふり返りを通して、午前の自分の姿が目標に十分到達できていないことや協力して働くことの大切さ等について気づくことができた。インストラクターからは、班の目標の確認がされるとともに、個人から班全体に視野を広げること、自分ではよくできていると思っても野島さんが十分でないと思ったら、それは十分できているとは言えない事などが伝えられた。子どもたちは、午後からの仕事を楽しみにしながら、班ごとに昼食をとった。

昼食時間が終わり、午前の仕事場から1キロほど離れた柑橘類としいたけ栽培をされている山へ歩いて移動した。はじめにした仕事は、牛糞堆肥を柑橘畑の一本一本の木の根元に置いていく仕事である。牛糞堆肥の山は、小さな子どもの背丈ほどもあり、黙々と一人ひとりが、袋やバケツに堆肥を詰めて木の根元まで運ぶ。そんな時にお宝発見！牛糞の中にカブトムシの幼虫が・・・。子どもたちの目が輝く。その様子を見ていた野島さんから「もって帰りたい人！」という嬉しいお話があった。早速幼虫を持って帰れるように準備される野島さんの姿に、喜びの表情を見せる子どもたち。嬉しい御土産ができた。

午後の作業は、この他にしいたけ栽培の山の整備を行った。この時の子どもたちは、太い木を運ぶことができずに困っている仲間にそっと手を差し出す姿が見られるようになっていた。この日の最後の仕事は、自分たちの仕事の点検作業。作業前後の様子を見比べ、自分の仕事を振り返ることも大切なことだと野島さんに教えていただいた。



午後の仕事の対価は、米・卵・牛肉・玉ねぎ・にんじん・キャベツ、そしてカブトムシの幼虫。今日の宿泊場所である秋穂地域交流センターへ向かう道のりで、班ごとに、夕食で何をつくるか話し合いながら約3キロを歩いて移動した。

秋穂地域交流センターに着いて、まずしたことはテントを張ること。インストラクターから手順を聞きながら徐々に立ち上がるテントの姿に、子どもたちは一日の疲れを忘れたかのようだった。笑い声が響くテント。対照的に、外での夕食作りにもかかわらず暗くなり始めたことや、仲間作りではなく、友達作りになっていることに頭を抱えるインストラクター。夕食作りをはじめた時は、ヘッドランプなしでは作業ができない状況になっていた。「お米に水はどれくらい入れたらいいのかな。」と言っていた班は、水を入れたらすぐに火を点け、お米をたき始めた。「わー、おいしそう」という歓声とともに出来上がったごはんは、芯がたっぷり残ったご飯。他人丼にスープ、野菜炒めなど各班の夕食が完成した。お昼から数個のパンしか食べていない子どもたちは、言葉を発することなく静かな夕食。予定より時間が遅れていたこともあり、急いで片付け、ふり返りとなった。ふり返りでは、「むだなおしゃべりに夢中になり、仕事が疎かになった」ことを反省する子に、「むだなおしゃべりはないよ」とインストラクターからのアドバイス。相手を知り、絆を深める為には対話が必要なことをインストラクターは子どもたちに語っていた。仲がよくなり始めた子の言葉遣いが気になった班では、名前呼び合うことも仲間作りでは大切なことだと伝えていた。

子どもが就寝した後、インストラクターと運営スタッフでふり返りと明日の予定確認をした。各班でのふり返りの様子、各班の課題を確認し、明日へ向けての打合せを各班で行った。打合せが終わる頃には、日付が変わっていた。



## 2日目「ジョブ、ふりかえり、閉会式」

期 日 10月14日（日）

場 所 秋穂地域交流センター～原田丸海産  
～秋穂地域交流センター

起床時刻の朝6時になってもテントの中から全く物音がしない静かな朝。インストラクターから声をかけられ、テントの外に出る子どもたち。出発までにすることの確認をし、それぞれの班で8時の出発までの準備を開始した。朝露で濡れたテントを干す子、荷物を片付ける子、朝食の準備をする子などゆっくりとした動きではあるけれど、昨日の疲れが残っている様子は見られない。朝食・掃除を済ませ、各班で打合せを行う。昨日の反省を踏まえ、今日の目標を確認し、出発の準備を整えた。

2日目の仕事は、水産加工等の仕事をされている原田丸海産。原田丸海産で商品開発を担当されている高野さんへ挨拶をし、準備に取り掛かる。昨日と違うことは、お客さんを意識したきめ細やかな配慮とスピードと丁寧さである。仕事は、一袋132g毎にホタテを真空パックにする工程。大切なのは、衛生面への絶対的な信用と商品の違いをつくらないことである。髪の毛を落とさない為の帽子とマスク

を着用し、十分な手洗いを終えた子どもたちは、ゴム手袋をつけて作業場へ移動した。従業員さんの仕事の様子を見させていただき、高野さんから説明を受け、仕事を覚えてジョブを開始した。初めは従業員さんから丁寧に教えていただきながらの作業であったが、徐々に子どもたちだけで行うようになった。しかし、132gのホタテを計る作業に戸惑う子どもたち。袋詰めの際、二人一組でおこなう作業は、袋から落とさないよう慎重に行わなければならない。ホタテの破片一つでも落とすともう一度計り直す。時間の経過とともに、工夫や相手をフォローする中で自然と二人の役割は変化し、スピードも速くなっていった。時々行われる高野さんからの商品チェックに緊張した空気の中で、子どもたちは1時間黙々と作業をし続けた。言葉はなくても、二人が息を合わせながら作業ができるようになっていった。さらに、1人がミスをしてしまっても、もう1人が作業に対してチェックできる関係になった。昨日の『「だれか行けよ・・・」という声が聞こえてきそうな雰囲気・・・』の時から比べると、

子どもたちの関係は仲間へと成長している。休憩時には、休憩室で皆が1つになって話をして過ごしていた。緊張感と開放感の中で、言葉を交わさず相手の考えを想像する仕事の中で、子どもたちはいつの間にか仲間を思いやり、気遣うことができるようになっていた。さらに、その後、工程を入れ替わった作業では、子ども同士が作業を教えあった。作業内容をしっかり理解し、わかりやすく伝えることの大切さを交流しながら感じ取ることができたようである。



この日の対価としていただいたものは、原田丸海産の商品のひとつのカレーライス。子どもたちは、満面の笑みを浮かべながら、おいしいカレーライスをいただき、各班で楽しいひと時を過ごした。さらに、原田丸海産の原田社長から商品の御土産をいただき、子どもたちは大喜びである。その後、お礼を言い、秋穂地域交流センターへ戻った。帰り道には、旅する蝶アサギマダラにも出会った。自然に目が向くことは、心にゆとりが出てきたことでもある。

最後のふり回り活動。一人ひとりが自分の変化や班の変化に目を向けることができた。さらに、班の中での自分の姿についても考えた。インストラクターからも一人ひとりの成長した姿が伝えられ、二日間共に過ごせた喜びを共有した。

閉会行事では、保護者の方に迎えられて、自分にとってのジョブプログラムがどのようなものだったか、自分自身の変化について、仲間とはどんなものなのかを皆の前で語った。一人ひとりが、自分に向き合い、仲間の話に耳を傾け、インストラクターや運営スタッフの思いを知り、涙と笑いの中で終わった閉会行事。子どもたちは、(これから始まる新たな生活に)「ってきます」の掛け声で、それぞれの舞台へ帰っていった。

たった二日間のジョブプログラム。友達ではなく仲間作りについて考える『SHOKU で旅する2日間、とことん味わおう～体で働く、頭で働く、心で働く。「職」から「食」へ、仲間とともに』は、県内各地から集まった16名で、大きな1つの花を咲かせて終えることができた。

最後に、このジョブプログラムの実施に御賛同され多大な御協力と共に、山口県の子どもの成長のために御尽力いただいた農事組合法人杵崎の里の野島さん、原田丸海産有限会社の原田さん、高野さんに心より感謝いたします。

#### 【参加者の感想より】

- 最初は自分から話しかけていなかったけれど、最後は自分から話しかけられるようになった。
- 一緒に協力していると、友達の良いところが見えてくるようになった。
- 声をかけ合ったり、協力したりすることができるようになった。
- 初対面の人でも話せばすぐ仲良くなれることがわかった。
- 一つ仕事が終わるごとにやりがいを感じる事ができた。
- 他人の思いを読み取って、その人に合わせて行動することができた。
- 仲間がいると一人ではできないこともスムーズにできることがわかった。
- 困っている人がいたら、助けられる人になろうと思った。

